

図書館情報学橋会会報 第27号(通号33号)

2020年3月発行 発行者 図書館情報学橋会

音楽図書館員を志望したもの…

加藤信哉（図書館短期大学図書館学科 1976年卒業）

図書館短期大学図書館学科を1976年3月に卒業し、筑波大学、秋田大学、図書館情報大学、東京大学、名古屋大学、熊本大学、山形大学、東北大学の各国立大学図書館に通算40年勤務し、ご縁があって2016年4月から地元秋田市にある国際教養大学で図書館長を務めています。

司書を目指したのは、中学高校と吹奏楽部に所属し高校で楽譜係を担当したことが背景にあるかもしれません。その頃から音楽図書館の仕事を漠然と希望していました。旺文社の受験雑誌『蛍雪時代』で図書館短期大学のことを知り、受験の準備を始めましたが、担任の先生から今まで進学実績のない国立の短期大学だから、相談には乗るが指導のしようもないと突き放され、高校3年生の夏に父と図書館短期大学を訪ね、過去の試験問題を見せてもらいました。それで少し安心したのか、余り身を入れて受験勉強をした記憶がありません。たぶん、入学試験の成績は下から数えた方が早かったでしょう。

短期大学在学中に購入しななめ読みした音楽（図書館）関係の資料は、Watanabe, Ruth T. *Introduction to Music Research*. Prentice-Hall, 1967 と Redfern, Brian. *Organizing Music in Libraries*. Clive Bingley, 1966 だけです。いざ就職という段になり、長男でもあったので異動の可能な国立大学図書館を志望し、国家公務員採用試験を受けました。それとは別に、音楽図書館志望のことを知っていた講師のS先生から、音楽大学の図書館を受けなくていいのかと背中を押され、都下のK音楽大学附属図書館の採用試験を受けましたが、第一次試験で不合格でした。後から聞くと、都内在住であることが採用の必須条件であったようです。

1976年4月に筑波大学図書館部に入職し、同時

に国際音楽資料情報協会（IAML）の個人会員となりました。1978年の春に、突然F女学院大学のM先生から電話が職場にかかってきました。開口一番、IAMLの日本支部設立の準備をしています。本部から提供された会員名簿にあなたの名前がいましたが、他の会員の方に聞いてもどのような方かわからないとのことなので直接連絡を差し上げました、と告げられました。これがきっかけでIAML日本支部の設立準備に関わりました。1979年の支部設立まで、筑波から六本木にある国際文化会館で開催された会合に何度も通ったことを覚えています。

IAML日本支部の例会を通じて音楽図書館協議会（MLAJ）の事務局長であったMさんの知遇を得ることができ、MLAJの事業にも音楽資料の目録関係で関わりを持つようになりました。1983年から1992年まで在職していた図書館情報大学の頃に *MLAJ Newsletter* に記事を執筆し、研修会の講師、専門委員会の委員を務めました。IAML 東京会議1988と広島国際会議「漢字文化圏の音楽資料とそのコンピュータ処理」ではそれぞれ発表を行い、また、1989年に学術情報センター総合目録データベースへの音楽資料入力に関する共同研究会の委員長として「学術情報センター総合目録データベースの音楽資料入力仕様についての提案」をとりまとめました。それらが音楽図書館にかかわる活動のピークだったかもしれません。2008年から2014年まではIAML日本支部の役員（例会担当）を務めました。

振り返ってみると、転勤も多く、音楽とは関連を持たない大学図書館勤務の余暇に音楽図書館に関かったので、その活動には自ずと限界がありました。今後は、IAML日本支部の個人会員とMLAJの賛助会員として、音楽図書館の支援ができればと思います。

変わるもの 変えるもの

筑波大学図書館情報メディア研究科
図書館情報メディア専攻長 佐藤哲司

2020年筑波大学は大学院を改組します。現在の図書館情報メディア研究科は、2002年に図書館情報大学が筑波大学に合流した際に誕生した部局であり、筑波キャンパスの中でも地続きではない離れに存在していました。[離れ]であることから、「筑波スタンダード」など筑波大学のポリシーを受け入れつつ、図書館情報大学については図書館講習所に遡る伝統を引き継ぎ、独自の文化が継承・形成されてきた様に思います。

今回、図書館情報メディア研究科図書館情報メディア専攻は人間総合科学学術院人間総合科学研究群情報学学位プログラムという名称を冠した教育組織として生まれ変わることとなりました。旧名称も繰り返し文字列の長い名称でしたが、新名称は一層長い名称となりました。これを機会に、多少の私見も交えて、今回の改組の目的あるいは変化の意義を述べてみたいと思います。

改組の検討が始まった当初は、筑波大学全体で一つの研究科、すなわち筑波大学大学院の下に専攻に相当する研究群を設け、その中に学位プログラムをフラットに設置する構想でしたが、いきなり一研究科に移行するのは困難であろうとの考えから、6つの研究群を束ねる3つの学術院を設けることで落ち着きました。情報学学位プログラムが属する人間総合科学研究群は一学術院一研究群構成なので、実質的には筑波大学大学院→学術院/研究群→学位プログラムの3階層ですが、人文社会ビジネス科学学術院は2つの研究群、理工情報生命学術院は3つの研究群から構成され、結果的に階層が増えることとなりました。

このようにして現在8研究科、85専攻であった筑波大学大学院は、3学術院、6研究群+6専攻へと改組されます。85あった専攻を6研究群に改組した

目的は、各研究群で共通する基盤科目の設定とともに、従来ならばひとつの専攻のみを担当していた教員が他のプログラムを協働指導できるようにすることです。学生目線で考えると、細分化された従来の専攻の枠を越えて幅広い視野のもとで研究ができるようにすることです。学生が将来の「なりたい自分」を形成するために必要な学問知識は拡大の一途にあり、また個々人で異なっていることから、専攻に相当する研究群を大きな組織とすることは、ある意味で自然な流れであり時代の要請に即した改組であると言えます。

こうして誕生した人間総合科学学術院は、医学や体育学、芸術など幅広い専攻を有する人間総合科学研究科に、教育研究科と図書館情報メディア研究科とが合流する形で構成されており、情報学学位プログラムを含む26学位プログラムからなる大規模な人間総合科学研究群を擁しています。このため、情報学学位プログラムに所属する学生は、研究という機会を通して、幅広い学問領域を踏まえて課題発掘・課題解決の能力を身につけることができるでしょう。一例を挙げれば、近年の医学の発展において、テレビドラマに取り上げられるような画像診断や遠隔手術に限らず、大量の入院患者データから退院を早めるケア方法の導出など、情報学との連携によって患者負担の軽減と医療費の軽減などに有効な解決手段を提供できると期待されています。また、昨今話題となっているラグビーなどの競技スポーツにおいても、ウェアにGPS（位置情報を知るためのデバイス）を取り付け、選手1人1人の運動量や疲労の程度をリアルタイムに計測する、まさに情報学と呼ぶにふさわしい技術が導入されています。

こうしたメリットが期待される情報学学位プログラムですが、それほど簡単に学位プログラムに移行できるものではありませんでした。これまで、図書館情報メディア専攻では、博士前期課程で修士（情報学）と修士（図書館情報学）を、博士後期課程では、博士（情報学）、博士（図書館情報学）、博士（学術）の学位を授与していました。学位プログラムと

は、その名の通り特定の（一つの）学位を授与することを目的とする教育研究の単位ですので、複数の学位を出すのであれば、それぞれに見合った学位プログラムを構成しなければなりません。一方で、幅広く充実したカリキュラムと研究指導体制を提供するには、相当程度の教員を確保しなければなりません。筑波大学では、これまでも教育組織である研究科・専攻と教員組織である系とを分離した組織運営をしてきていましたが、それでも2つあるいは3つの学位を出せるような学位プログラムを用意することはできないとの苦渋の選択がありました。また、日本では情報学(インフォマティクス: Informatics)と情報科学(インフォメーションサイエンス: Information Science)を同一視する傾向があるように感じますが、私たちは、真に文理融合したインフォマティクスを日本に定着させようとの強い意志を持って、情報学学位プログラムをデザインしてきました。そこでは、人々が行う知的な諸活動を対象とする図書館学に端を発する図書館情報学と、情報理論あるいは計算機科学に端を発する情報科学とが交差する、あるいは両者を包含する領域としての学問分野を対象とし、教育と研究を展開していきます。情報学学位プログラムは「情報学」という学位を授与、すなわち、情報学を修士レベルあるいは博士レベルで修めたことを保証する学位プログラムです。そのために、授業のカリキュラム(講義・演習の内容)も大幅に見直してきました。最も大きな変革は、グローバル化してきた社会を先取りして英語での講義を大幅に増やしたことでしょう。専攻のカリキュラムでも既に幾つかの科目は英語で開講していますが、学位プログラム移行後の博士前期課程は、ほぼ全ての講義科目を隔年で英語・日本語の両言語で開講します。このための準備として、ここ数年で採用された若手教員は、全て英語での講義が可能であることを条件としています。英語開講科目の学生需要は現時点では未知数ですが、こと情報学の領域では、技術進歩に垣根はなくグローバルであることが大前提となっていますので、英語で講義を受け議論をす

る能力を身につけることは、大学院教育に期待される主要な要素の一つとなることは間違いないでしょう。

働きながら学ぶ社会人のリカレント教育も一層充実しています。東京キャンパスにおいて平日夜間と土曜日のみで修士の学位を取得できる制度はこれまでも用意していましたが、開講科目が少ない、あるいは偏っているなどの制約がありました。学位プログラムに移行するのを契機に大幅な見直しを実施し、開講科目の拡大等の対処をしました。また、社会人であっても平日につくばに来ることができる学生は、つくば駅に近い春日エリアで講義を受けることもできるなどの自由度も高めています。また、海外の大学を卒業する帰国子女や留学生を主な対象として10月期に入学する英語受講者向けの博士前期課程カリキュラムも展開していきます。

博士後期課程に関しては、より一層研究に専念できる環境を提供することを目的に、これまで必修としていた講義科目の履修を撤廃し、演習科目の履修だけを必修科目としました。一方で、演習科目には、自らの研究内容を発表してコメントを受ける、また他学生の発表にコメントする「情報学セミナー」という科目を用意し、日常的に他者から批評を受ける、あるいは、他者の研究を批評する経験を積む機会を増やしました。小生の限られた経験でも、新規性があればあるほど周囲の理解を得るまでに時間がかかることは何度もありました。新規なモノやコトを提案するのは(理解に時間がかかる)孤独な戦いであり、だからこそ、「情報学セミナー」での経験を活かして孤独を楽しむ余裕を持つことができればと期待しています。

最後に、入学試験についても少なからず見直しました。博士前期課程と後期課程の入試呼称を統一し、7月期は推薦入学試験、8月と2月期は一般入試の一般選抜と社会人特別選抜、更に、2月期に限り10月入学を前提とする英語受講者特別選抜を行います。「定員」という言葉(概念)は専攻すなわち人間総合科学研究群に与えられるので、情報学学位プログラ

ムでは「募集人員」という言葉を使って、博士前期課程は 54 名を博士後期課程は 12 名を募集します。これまでの図書館情報メディア専攻では、博士前期課程 37 名、博士後期課程 21 名であった定員に対して、社会の要請が高い博士前期課程の募集人員を大幅に増やせたのは、自由度の高い学位プログラムだから実現できた見直しとすることができます。

以上、学位プログラム制に移行する機会に情報学学位プログラムで見直し変更した内容を概観してきましたが、一方で、変わらないことは学生の主体的な学びを積極的に支援していくことです。働きながら学ぶ、あるいは学生自身の都合によって時間をかけてゆっくり学びたい学生には長期履修制度を用意しています。また、博士後期課程には最短 1.5 年で学位を取得できる早期履修制度も用意しています。博士前期課程からの継続で後期課程に進学した場合に、前期課程在学中に十分な研究業績を上げることで、2 年間で修士の学位を取得するか、+1.5 年の 3.5 年で博士の学位を取得するかを選択は、十分に魅力的な提案となるだろうと考えています。

小生のつたない説明で分かりづらい箇所も多々あったことと思いますが、最後まで読んでいただいた皆さまは、既に『情報学学位プログラム』のサポーターです。是非ともご自身あるいは身近な方に受験をお勧めいただけますと幸いです。

図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日 1-2 E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ <https://tachibana-kai.com/web/>

F a c e b o o k <https://www.facebook.com/lib.info.tachibanakai/>

発行: 2020 年 3 月 10 日